

## 『父の心、子の心』（ルカの福音書 15 章 25-32 節）2023.11.12.

<はじめに> 自分の親兄弟をどのように呼んでいますか。それはいつも一緒でしょうか。状況によって使い分けがありますか。肉親の呼び方一つにも微妙な人間関係が滲み出て来ます。この物語はたとえ話で、父は神、息子たちは人を表し、その相互関係を描いています。

### I 兄息子の心(25-30)

#### ①キレル兄(25-28)

兄は家業の農場で長年の間、父のもとで働いていました。しかし、この日畑から帰って来ると家から演舞の音が聞こえます。長年行方不明だった弟が無事帰って来たので、父が越えた子牛を屠って祝っているとしてもべから聞いて、兄は怒り、家に入ろうとしません。

#### ②「お父さんは甘い！」(29-30)

好き勝手をして財産を使い果たしてようやく帰って来た弟に、父が厳しく咎めもせず、喜び迎えて肥えた子牛まで屠る姿に、兄の不満と怒りは爆発します。父のもとで言いつけを守りながら長年忠実に働いて来た自分にこそ、労いと報いを父は示すべきだ、とです。

#### ③兄の本音

兄が父の戒めを守り、父から与えられた仕事をするのは、全て父から愛、恩顧、信頼を受け取る手段だからです。兄息子の姿は、律法を守り、善行を行えば、神から報いを受けられる、と考える人の代表です。そのとおりに神が報いないなら、その人は怒り反発します。

### II 弟息子の心(12-21)

#### ①計算高い弟(12-14)

やがて家業は兄が継ぎ、父の財産の自分への分け前は兄の半分です。家に残るよりも、さっさと分け前をもらってこの家を離れて、自由気ままに生きた方がいいと、弟は考え行動に移しました。財産が予想以上に早く無くなり、そこに飢饉が来ることは計算外でしたが。

#### ②「それなのに私はここで…」(15-21)

遠い国では頼れる人はほとんどいません。やっと知縁で得た仕事でも、自分の扱いは豚以下です。そこで彼は、父のもとを離れたことが間違いであったと気づき、父のもとへ帰る決断を行動に移します。息子としてではなく、雇い人としてでも受け入れてもらいたい。

#### ③弟息子の本音

当初、弟は父を財産目当ての金づるで、もらえるものを得たならば、もはや用はないとして遠く離れます。利用価値がある間のみ関係です。しかし、実は恵まれた環境であったと後で気づき、そこに置いてもらうために、今度は自分を利用してもらうと差し出します。

### III 父の心は神の心(22-24、30-34)

#### ①惜しみなく与える

父は、弟に生前分与を拒まず与え、帰って来た弟を着飾らせて肥えた子牛を屠り、兄には「私のものは全部お前のものだ」(31)と言います。私たちに要求を突き付けて、私たちがら奪うのが神だ、と思っている人がありますが、聖書は正反対の絵を示しています。

#### ②惜しみなく赦す

遠い国に旅立った弟の浅はかさや失敗を予想した父は、帰って来る彼を待ち、遠くに見つけます。忠実に働きつつも不満を内に秘めていた兄の怒りも受け止めようと出て来て宥めます。父は、その父を誤解していた二人をなおも赦し、関係修復を望んでいます。

#### ③惜しみなく喜ぶ

父の本音は、一つひとつのことを感謝し、ともに喜ぶお互いの関係を保つことです。それが一時的に崩れたとしても、修復して進もうと、あきらめずに向き合われます。紆余曲折がありながらも、乗り越えて一つとなって喜ぶことは、全部思い通りに行く喜びにまぎります。

<おわりに>あなたが共感できるのは、兄、弟、父の何れでしょうか。二人の息子の前に父は進み出て語り掛けています。父のことばと姿は神そのものです。この物語を通して、自分の心を見つめるとともに、神の本当の心を知り、受け入れて、ともに喜ぶ者となれますように。(H.M.)